
1936年のアメリカにおける20世紀美術史形成

—ジュリアン・レヴィ画廊のジョルジョ・デ・キリコ展の位置づけを出発点として

木水千里 (成城大学)

1936年3月、NY近代美術館(MoMA)は「キュビズムと抽象芸術」展を開催する。館長のアルフレッド・バーJrは、カタログで20世紀初頭の美術は自然の模倣を捨てたと語り、またアフリカ芸術の抽象芸術への影響を指摘する。一方、同年12月、同美術館は、「幻想芸術・ダダ・シュルレアリスム」展を企画し、初めてアメリカで大々的にシュルレアリスムを紹介する。シリーズとして構成されたこの二つの展覧会は、MoMAが考える20世紀美術の二大潮流を示している。

本発表は、これらの展覧会の間にジュリアン・レヴィ画廊で開催されたジョルジョ・デ・キリコ展を取り上げる。ダリがアメリカで注目されるきっかけを作ったのが同画廊であり、また「幻想芸術・ダダ・シュルレアリスム」展でもデ・キリコが紹介されたことから、この展覧会はシュルレアリスムの文脈に位置付けられよう。しかし、このカタログの序文は、コレクターとしてシュルレアリスムに関心を持たなかった美術研究家・教育者のアルバート・C. バーンズによって書かれている。どうしてバーンズはデ・キリコに関心を持ったのか。この序文を理解するには、新たなデ・キリコ解釈が必要なのである。そこで、MoMAが構想する20世紀美術の系譜学から一旦離れ、20・30年代の芸術運動の複雑な相関関係を改めて検証することを本発表の目的とする。

その際、一般的な批評に見られる相反する二つのデ・キリコ像を手掛かりに、ダダやシュルレアリスムと同時期に存在した前衛的古典主義を読み取り、第一次大戦後に二つの芸術運動がヨーロッパに存在していたことを明らかにする。そして、前衛的古典主義を通して、バーンズのデ・キリコ解釈を読み解き、さらに、彼がこの芸術運動を自己流に解釈していたことを証明する。

また、「キュビズムと抽象芸術」展では、アフリカ芸術が抽象芸術の起源の一つに設定されていたが、そのことは20世紀美術史におけるアメリカのアイデンティティ形成において重要な役割を果たしていた。それゆえ、ダダイスト、シュルレアリストも同様にアフリカやオセアニア芸術に関心を示していたにもかかわらず、その事実は両カタログにおいて殆ど言及されない。その代わり、シュルレアリスムは15世紀まで遡った様々な幻想芸術の中に位置付けられる。いわば、故意の言い落としと、別の起源の付与によって、アフリカ芸術を抽象芸術へと繋ぐ系譜が間接的に補強されている。しかし、バーンズもアフリカ芸術に関心があった。ただし、それはバーの受容とは異なっており、その差異とは単なる違いに留まらず、彼らの芸術観が相互補完関係にあったことを意味している。

以上のように20世紀における美術史の形成の過程が、ある種のダイナミズムのうちに置かれていた様々な系譜を恣意的に整理することに他ならなかったことを確認することは、今一度新たな目で美術史を見つめなおす契機となるだろう。